The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	言語と心 後期ヴィトゲンシュタイン哲学をめぐる考察
Author(s)	丸田, 健
Citation	大阪大学, 2001, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.11501/3183710
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【1】

氏　　名	丸　田　　健（まる　た　けん）
博士の専攻分野の名称	博　士（人間科学）
学　位　記　番　号	第　15881　号
学位授与年月日	平成13年2月28日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 人間科学研究科人間学専攻
学　位　論　文　名	**後期ヴィトゲンシュタイン哲学をめぐる考察**
論文審査委員	（主査） 教　授　奥　　雅博 （副査） 教　授　中山　康雄　　助教授　檜垣　立哉

論文内容の要旨

オーストリアに生まれ、専らイギリスで活躍したルートヴィヒ・ヴィトゲンシュタイン（1889－1951）は、今世紀を代表する哲学者の一人としての不動の評価を得ている。本稿は、常に言語という観点に立脚しながら様々な哲学的問題にアプローチした彼の業績の中から、特に、後期時代の関心の中心の一つであり、多くの哲学者に影響を与え続けている彼の「心の哲学」を取り上げ、それを検討する。

本稿の目的は、大きく二つに分けることができる。目的の一つは後期ヴィトゲンシュタインの心の哲学の正しい理解を得ることにあり、もう一つは、ヴィトゲンシュタイン哲学の適切な理解を介して、我々の日常言語に備わる、心に関する諸概念の正しい理解を得ることにある。したがって、彼の哲学の正しい理解を妨げると判断されるヴィトゲンシュタイン解釈に対しては批判が試みられるだろう。それと同時に、仮にヴィトゲンシュタイン自身に心的概念の正しい理解の妨げになると思われる側面があるとすれば、それもまた批判の対象となるであろう。

ヴィトゲンシュタインの心の哲学は、一般に「私的言語論」の名で知られる彼の一連の議論に触れることなしに論じることはできない。我々は、この議論の検討から出発する（第一章）。ヴィトゲンシュタインの私的言語論に対しては、標準的と言いうる解釈が存在する。本稿ではそれを敢えて、公的基準による意味の検証主義的解釈と呼ぶことにする。この解釈によれば、概念には客観的基準が必要であり、特に心的概念の場合、必要な客観的基準とは典型的には行動だとされる。客観的基準は概念の使用を規定することによって、その意味をも規定する。さらにこの解釈は、そのような基準を欠く心的概念は使用が一定するとは言えないがために無意味だという考えを、ヴィトゲンシュタインに帰するものである。だが、心的概念の意味は行動や状況といった外的基準に支えられており、そういった基準を示すことでのみ、不足なく説明できる、とすることは、我々の言語実践を正しく描写しているとは思えないどころか、ヴィトゲンシュタイン解釈としても非常に一面的なものになるだろう。本稿の努力は主に、このことを示すために費やされる（第二章－五章）。

第二章では、私的言語論を代表するとされる「感覚日記の議論」を取り上げ、それが基準による検証主義を擁護するものであるどころか、むしろ基準による正当化を必要とするような心的概念の理解の批判になっていることを示す。第三章では、独立の基準を持たない内的概念をヴィトゲンシュタインが否定しているのはないという主張を、第二章の議論を深めつつ、「甲虫の議論」との絡みで試みる。第四章では、私的言語論のスタンダードな解釈の形成で大きな役割を果たしたと言えるマルコムの或る議論を取り上げ、彼の見解を批判することで、痛みと振る舞いの間にある

と見なされる関係が、検証主義的な硬直したものではないことを示す。第五章では、感覚でなく意図の表明に関するヴィトゲンシュタインの見解を調べ、そこには伝統的解釈が強調するような客観的基準の要請は見られないことを指摘する。

以上の試みが成功するなら、ヴィトゲンシュタインの心の哲学は、意味の検証主義的解釈に示されるより、はるかに複雑な多面体であることが理解されるだろう。そしてこのような彼の心の哲学を介して、ヴィトゲンシュタインがその展望を得ようとした心的概念に関する我々の言語実践自体が精妙きわまりないことが改めて認識されるだろう。思うに、「言葉で名状しがたい、体験の私的側面」という概念も、ヴィトゲンシュタイン哲学が否定する必要はない。なぜならこれは既に立派に公的言語のリソースをふんだんに利用した我々の言語ゲームに属する言い回しだからである。そしてこの表現の意味を理解するために、話者の私秘的体験を覗く必要に駆られることもない。というのもヴィトゲンシュタインが言う通り、意味は表現の指示対象にあると言うより、むしろ表現の使用にあるならば、「表現の指示対象が見えないなら、表現の意味も分からない」とすることは、二つの、密接に関係しながらも厳密に同じではない概念を混同することであるからだ。

ここまではヴィトゲンシュタイン哲学の微細な検討に基づき、検証主義的な標準的解釈を批判することを目的とするものである。しかし心的概念の適切な理解を得るというもう一つの目標があった。この目標の下に立つとき、我々はヴィトゲンシュタインの見解の或る側面には疑念を抱かざるを得ない。第六章では、比喩的言語使用という視点から、ヴィトゲンシュタイン哲学を批判することになる。ヴィトゲンシュタインは、心的概念に組み込まれたアナロジーや隠喩を否定的に扱ったが、言語ゲーム的な心的概念の展望のためには、そのような姿勢は望ましくないことを指摘する。ただしこの批判を乗り越える方法は、ヴィトゲンシュタイン哲学に内包されていることも、同時に主張される。

論文審査の結果の要旨

本論文は、いわゆる「私的言語論」を中心とした後期ヴィトゲンシュタイン哲学に正面から取り組んだものである。数多くの論者が様々に論じている難問であるが、丸田氏は最も普及している通説に対して批判を加え、自説を展開している。論文は一貫した立場で、よく考えを練った上で明晰に論述されており、資料の扱いも適切である。

標準的な解釈の立場を批判するものだけに、丸田氏の説が広く研究者に受け入れられるものであるかどうかについては疑問も残るが、新しい解釈として詳しく検討するに値するものである。

以上、本論文は、硬直した感もあるヴィトゲンシュタイン研究に新しい一石を投じるものであり、理論展開の明晰性や一貫性から博士（人間科学）の学位の授与に十分に値するものであると判定された。